

済洲島における石垣の屋敷囲い

漆原, 和子 / URUSHIBARA-YOSHINO, Kazuko / KATSUMATA,
Hiroshi / 勝又, 浩

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

55

(開始ページ / Start Page)

33

(終了ページ / End Page)

45

(発行年 / Year)

2007-10-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003241>

濟州島における石垣の屋敷囲い

漆原 和子・勝又 浩

1. はじめに

濟州島は火山島であるため、石垣用の石材が豊富である。また冬の季節風が強く、防風のための石垣が多く分布する島として知られている。石積みの様式は、これまで南西諸島や九州、対馬などで、琉球様式と名付けた積み方とよく似ているのではないかと考えられる。一方、第二次世界大戦前には日本による統治が行われたことから、日本の九州以東でみられる本州様式も存在する可能性もある。以上のことから、濟州島の屋敷囲いや、畑でみられる防風石垣の石積みを詳細に検討する必要があると考えた。戦前には梶田一二氏の優れた一連の地誌的研究があり、1980年代には、高野史男氏をはじめとする立正大学地理学科の地理的調査記録もある。それらの中に、濟州島の強風に対する民家や石垣の工夫が述べられている。本研究では、特に母屋の周りを取り囲む石垣の様式や、畑の防風石垣の石積みの方法を調査し、濟州島の石垣の特色を明らかにすることと、石垣と強風との関係を検討することを目的とした。

2. 地域の概要

2.1 濟州島の地理的研究

日本の濟州島研究は、朝鮮総督府が行ったものの中に述べられており、気候に関わる調査報告や、地質、動植物の研究がなされている（川崎、1930；中村、1925；朝鮮総督府観測所、1936；森、1928；中村、1930）。また、第二次世界大戦前か

ら戦中にかけて、ラウテンザッハ（Lautensach, 1935, 1945）によって朝鮮半島の研究が行なわれ、濟州島についても述べられている。

1930年代の濟州島における多数の地誌的研究は、梶田の多くの論文によってなされた。濟州島の記述に優れており、今日では当時を知ることでできるデータとして貴重な論文である。たとえば、梶田（1934a, b）は濟州島の海女や日本への出稼ぎ海女、濟州島の牛や馬の放牧と石垣網や養蜂について述べている。これらの中で、濟州島の牛馬は終年放牧であることが紹介され、北向き斜面は冬の季節風が強く、冬季の放牧には不利であると述べられている。また当時、標高200～300mから600mの間は帯状の草地となっていた。600m付近は傾斜の変換点にあたるため湧水が多く、透水性の大きな山地斜面では、牛馬の飼育にあたって、水確保ができることが放牧場立地の好条件であったようである。また、梶田のこれらの論文には上縁森林地帯との境界は上場城といわれる石垣を築き、下部の中間地帯との境界にも下場城という石垣を築いて、牛馬が他地域へ侵出しないようにしていた。その石垣が、今なお残存すると記述されている。そして土地利用上、(1)海岸地帯(0～200m)；土地利用度高率、(2)中間地帯(200～250m)；半耕、半牧地帯、(3)山間地帯(350～600m)；放牧地帯、(4)森林地帯(600m以上)；傾斜度急変、と区別している。また、石垣については貴重な記述があり、「海岸地帯より中間山間と垂直的な横断路を選ぶ時、路上に休耕地に放牧地域に目撃する牛馬の群は夥しいものである。従って人家はもちろん耕地は悉く120～130cm高度の石

垣が築繞され、牛馬の侵入を防いでいる。環状道路全長 160km 余、両側石垣を連ねた景観は、小萬里の長城の観がある。」と述べている。2005 年 3 月の今回の現地調査時よりもはるかに多くの石垣があったことがうかがわれる。また「その石は耕地内にありし石を拾ひ上げて、其周囲に積み重ねたもので、他より態々運ぶを要しない程に火山礫が分布する」とも記載されている。また自然条件からみると、北向き斜面では馬が卓越し、牛や蜜蜂は南斜面に卓越していると述べている。

梶田 (1935) は濟州島から内地への出稼ぎについて紹介し、また、梶田 (1939a, b) は濟州島の聚落の地誌的研究 (第 1 報), (第 2 報) について述べている。これらの中で、集落の立地条件は飲料水の確保を第 1 とした。湧水や井戸水利用の他に天水利用も行なわれており、天水の採水方法として、採水林があると述べている。民家は、石垣の内側に一見防風林のようにみえる椿やビワの林を有しており、幹から集水した水を甕、もしくは貯水タンクに貯めておく工夫がされている。この中で、濟州島農家の間取りと、屋敷囲いとしての石垣の図面が示されている。石垣の隅角が曲率を持っていることも示されている。また石垣の高さは、1.5～2 m あり、石材は黒色玄武岩の角礫で、野石積みであることが伺える。「……角礫を積み重ねたにすぎず、礫間の空隙を通じて、内外両側から窺う程度で一見不安定感があるが祖鬆な礫面は能く組み合っている。……実に石垣は島固有の文化景観であり顕著な地域性である。」と述べている。

戦後は韓国の研究者による地理的研究が多く発刊されるようになり、建設部国立地理院編 (1986) 「韓国地誌」や、済州道編 (1982) 「済州道誌上・下」、済州市編 (1985) 「済州市三十年史」などがある。文化人類学的観点からは、泉 (1966) の「済州島」が発刊された。そして済州島研究が立正大学地理学教室と建国大学地理学教室の共同研究として、1984 年から 1987 年まで行なわれた。その成果は、立正大学日韓合同韓国済州島学術調査団 (1988) として発刊された。この報告書は自然

的記述に加えて、1980 年代の濟州島の人文地理的事象が良く調べられており、前述の梶田氏の 1930 年代における地理的事象と 1980 年代の変化を追うことができる。例えば海女漁業の変貌については元 (1988) が述べている。また、高野 (1996) はこの調査結果を踏まえ、「韓国済州島」を中公新書としてまとめている。

2.2 濟州島の地理的特色

濟州島は、韓半島の南端から約 90km の位置にある (図 1)。漢拏山 (1,950m) を最高峰とする円錐形の山地で、裾野には約 360 個の熔岩円錐丘をなす寄生火山が分布する。島の面積は 1,840km²、東西約 73km、南北約 31km で長楕円形をなす。島の等高線と主な集落は図 2 に示した。玄武岩の熔岩と最後の活動による火山放出物は透水性が良く、降雨は地下水として流下し (崔, 1988)、山麓の低地で、かつ地下水か地表水のいずれかが得やすい場に集落が立地している。島全体として、海岸は崖をなす。高野 (1988) は、南部に 20m 前後の段丘崖が連なることから、島の南側が隆起する地殻運動が存在すると考えている。

第三紀末に浅い大陸棚を構成する花崗岩に粗面岩質の熔岩が噴出し、更新世中期には粗面安山岩が厚く堆積した。更新世末期には、それらの表面を覆う玄武岩の熔岩を伴う大噴火があった。従って、濟州島の表層は広い地域が玄武岩の熔岩と、その火山放出物からなる。また、火山の活動記録は、AD1002 年、1007 年と、1455 年、1570 年に火山爆発と地震があり、多くの被害が記録されている (姜, 1988)。熔岩洞は北西側、北東側に多く分布する (洪, 1988)。

植生は垂直成帯性を示すが、漢拏山の北向き斜面と南向き斜面では植生帯の高度が異なる。金 (1985) によると、植物の種は 1620 種余である。植物相は泉 (1966) や森 (1928) の研究もあるが、高野 (1988) から植生の垂直成帯を示す図を引用した (図 3)。常緑広葉樹 (照葉樹) 林帯は、北向き斜面では 450m まで、南向き斜面では 700m、常緑樹と夏緑広葉樹木の混合林は、北向き斜面で

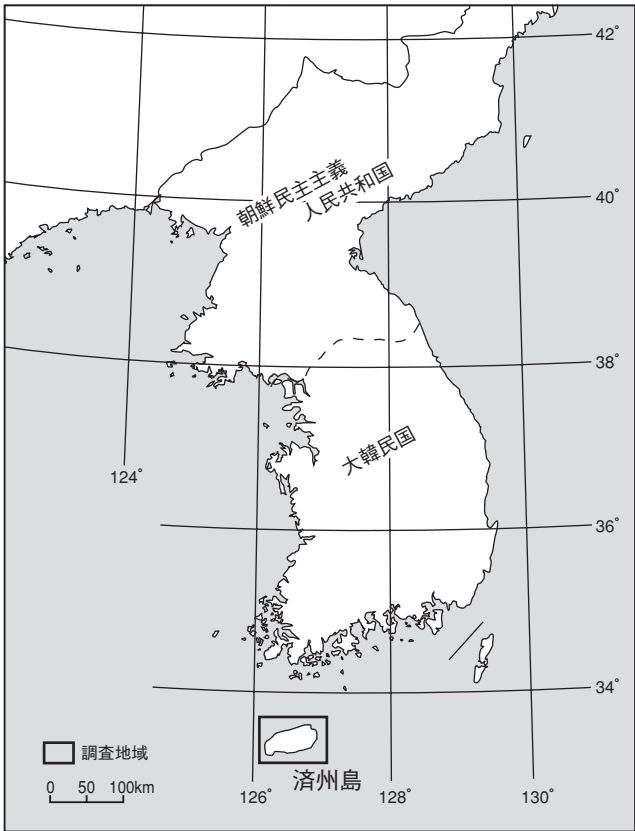


図1 済州島の位置図

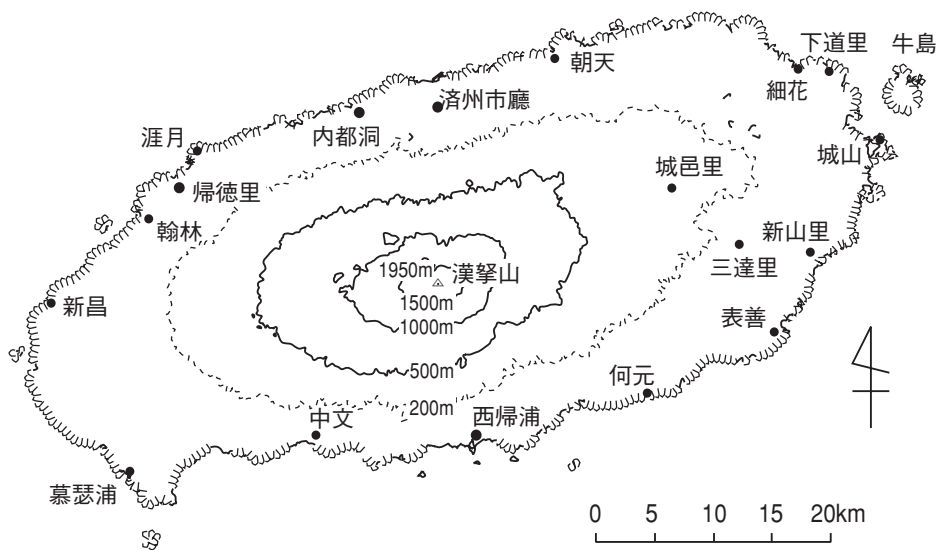


図2 済州島の地形と集落の位置図

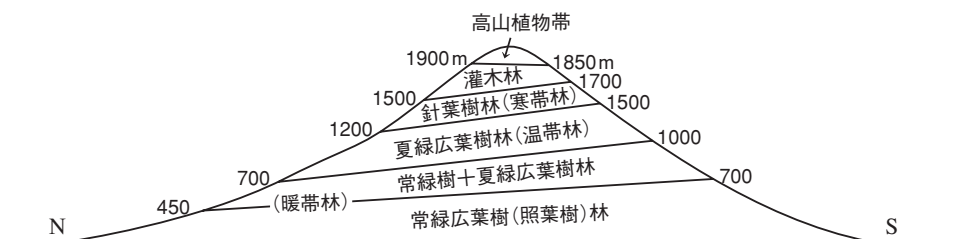


図3 漢孺山南北断面に沿った植物分布限界 高野 (1988) による

700m, 南向き斜面で1,000m, 夏緑広葉樹 (温帯林) は, 北向き斜面で1,200m, 南向き斜面で1,500m までである。針葉樹林 (寒帯林) は, 北向き斜面で1,500m, 南向き斜面で1,700m まで, 灌木帯は北向き斜面で1,900m まで, 南向き斜面で1,850m までである。それよりも高山は高山植物帯となっている。近年カン (2003) は, 済州島の高山の植生について詳しく紹介している。

済州島の気候は李 (1988) によればケッペンの気候区分では Cfa (温帯湿潤) 型である。四季ははっきり区分できるが, 冬は韓半島の他の地域より約1ヶ月短く, 夏季は1週間長い。島の北側と南側では気候が著しく異なる。島の北の済州では平均気温15.1℃, 最寒月の平均気温は5.2℃である。島の南の西帰馬では, 最寒月の平均気温6.0℃, 年平均気温は15.8℃である。年降水量は, 済州は1,440mm, 西帰浦で1,718mm である。済州島の降水は夏季集中型であり, 冬季は黒潮により地形性の降水があるが, 一般的に乾燥している。6月には南東季節風が卓越して, 梅雨前線による降水が大となるが, 南向き斜面で著しい。台風は8月に多いが, 年3～8回襲来する。冬季 (11～3月) は北西の季節風が卓越し, 5 m/s 以上の風は, 済州で42.5% である。特に島の北側で強風が長期にわたり, 吹き続ける。

3. 石垣

3.1 済州島における石垣の分布

山麓をめぐる標高200m以下の土地は傾斜3°以下の緩斜面で, よく耕地化されている。集落や

市街地のほとんどは, この高度までに集中して分布している。しかし, 緩やかとはいえ傾斜を有するので, 土壌流出を防ぐことと, 強い北～北西の季節風を防ぐために, 石垣を築いている。薄い火山灰土に覆われた畑の中の熔岩塊や礫を掘り出して, 土地境界と防風と土壌流出防止を兼ねて畑の周囲に石垣を積んだ。その高さはばらつきが多いが, 少なくとも高さ1.2mを超える。畑の境界に積んだ石垣はかなり特徴的で, 日本の石垣と異なっている。明確な違いは次の3つである。1つ目は, 石垣は野石積みで, ほとんど一列に石を積み上げる。石積みの間はすいていて風が吹き抜ける。2つ目は, 石垣の隅角はゆるい曲率を持って道なりに, または畑の境界に沿うように曲げられていて, 直角をなす隅角を持たない。3つ目は, 重い玄武岩礫を用いる。

済州大学宋成大教授は, 済州島の石垣の分布の条件を, 次のようにまとめた (宋, 2001)。

- 1) 玄武岩の石 (礫) があること。
- 2) 火山灰の中に石礫があること。
- 3) 北西の冬の季節風が強いこと。台風は防風に対しては季節風ほどの影響がないこと。
- 4) 放牧している牛, 馬が, 自宅へ自力で戻る際, 他の畑へ進入しないように, 石垣で畑を囲う必要があった。
- 5) 各自の耕地や, 屋敷の境界を石垣で明瞭化する。

済州島の石垣はさらに, 畑や民家も含めて, 次の3つの積み方に区分されると述べた。

- 1) 玄武岩を用いて, 大きめの礫を一列で積み上げる。礫の間の空間はすかせておく。風の力で

揺れるが、倒れなければよい。

2) 下方に小さい火山礫を積み、上方に大きな礫を積む。ただし、この型は小さい火山礫があるところに限られる。

3) 幅のある石垣を積み、外側は大きな玄武岩を積む。中に小石をたくさん入れる。この型は、烽燧台（チュゴン）、城、砦、墓の周りなどに用いる。

また、金（1998）は、修士論文として石文化について述べ、その中に石積みの種々の様式をまとめている。カン（2000）は、畑の石垣を空中から撮影し、その分布が格子状ではなく、地形に応じて曲率をもって曲線状に走る石垣であることを紹介している。

3.2 中山間部にみる石垣

高野（1996）の記述から、牧場についてまとめると次のようである。

標高 200m から 600m までの傾斜地は、耕地としては利用されず、放牧地として利用されていた。この斜面では、済州島の牛と馬の放牧を行ってきた。本格的な牧畜が開始されたのは、済州島が元の支配下に入ってからとされている。済州島にはもともと野生在来種の済州馬（ジョラン馬）が生息していたが、元はさらに蒙古馬を導入し、専門家を送り込んで軍馬の飼育にあたらせた。14 世紀後半には、高麗朝の支配のもと、島内 10ヶ所に官営牧場が設けられ、10,000～20,000 頭の馬と、3,000 頭の牛が飼育された。朝鮮王朝（李朝）時代には、官営牧場がいっそう整備され、監牧官制度が導入された。牧野は 13ヶ所に分けられ、その境界は石垣で明確に区分された。

日本の統治下に入ると、官営牧場は閉鎖され、13 の牧野は 112ヶ所の部落共同牧場に分割された。1939 年当時、約 21,000 頭の馬が飼育されていた。1945 年の解放直後の混乱で激減し、1957 年には約 7,000 頭まで減少した。1966 年には 20,000 頭まで回復したが、そのあと減少の一途を辿り、1990 年代には約 3,000 頭まで落ち込んでいる。写真 1 には牛島に臨む海岸で放牧している馬を示し



写真 1 牛島に面した済州島東海岸に放牧されている馬

た。すでにこの島には固有種であった済州馬は存在せず、交配の進んだ馬である。

漢拏山麓の北側斜面と南東斜面の中腹に、今も朝鮮（李）王朝時代に牧野の境界として築かれた石垣が残っている。北斜面の済州市背後の 300～400m に 40km 以上にわたり、また南東斜面の 300～400m に約 25km、200m 等高線にそって約 30km にわたり残っている。これらは、放牧された牛馬が高地の森林地帯や、斜面下方の畑や原野に入り込まないように築かれた石垣の一部である。1947 年 3 月のデモに端を発し、1948 年 4 月 3 日に武装ゲリラと島民が立ち上がり、ヨムサン事件が勃発した。このため中山間部の村民や集落を海岸地帯に移し、1949 年までに多くの中山間部の村は全滅した。1953 年頃にはゲリラ活動もなくなり、1954 年に漢拏山の立入禁止も解除され、事件は終わった。この事件の際、放牧地の石垣はかなり破壊された。しかし、1950 年代の石垣はキム（2000）の写真に示されており、当時の石垣を知ることができる。済州大学の宋成大教授は、1950 年代末から石垣が少なくなってきたようだと話している。図 4 には高野（1996）による部落共同牧場の分布図を示した。何年の状態を示すのかは明確に示されていないが、中山間部の牧場の分布がわかる。

3.3 民家の特色と屋敷囲いとしての石垣

済州島の民家はきわめて特徴的であり、草屋根を縄でおさえた屋根が一般的であった。筆者の 1

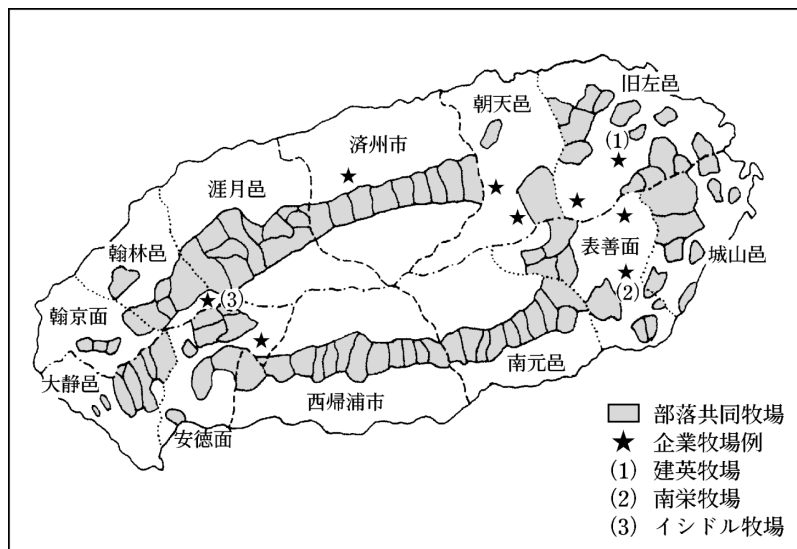


図4 部落共同牧場の分布 高野 (1996) による

人漆原は1980年代の済州島には、現在よりはるかに多くの草屋根の民家があった事を観察している。草屋根で冬の季節風や台風に備えるためには、軒を超える高さの石垣が必要である。また、草屋根の補強のために、縄をかける必要があり、伝統的には稲わらの縄を用いたが、今日ではゴムのひも(車のタイヤを細く切って作る)を用いている家が多くなった。韓国の伝統的な民家について、張(1989)は次のように述べている。その屋根はチガヤで葺いてあり、1～2年に一度葺き替える。茅縄で網状に押さえをするが、縄の太さは、島の東半分では直径3 cm内外であるが、西半分では直径4 cmのものをを用いる。これは冬季の北西風と夏季の南西風が西半分の方で強いためである。また、縄をかける網目は大きいもので40×42cm、小さいもので17×15cm、平均で25×25cm程度であり、これには、地域差は明瞭ではないようである。屋根の葺き替えは、個人か又は共同で行なう。共同作業を寄り合う(オウンダ)といい、寄り合いをオウルロトと言っているという。また、茅葺きの他にスレートやトタン、瓦もある。

高野(1996)は、このような典型的な伝統的民家について述べ、図5のように典型例をモデル化して示した。屋根はゆで卵を伏せたような型で、

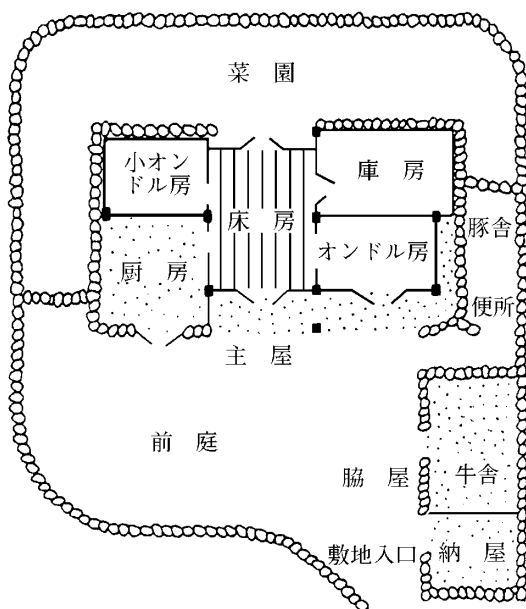


図5 済州島の民家形態 高野 (1996) による

草葺き平屋形式であり、草葺き屋根は風に飛ばされないよう縄を網目状に編んだネットでしっかり固定されている。民家の壁は熔岩塊を積んで固めた石壁である。間取りは標準的なものは三間型であるが、厨房のかまどが朝鮮本土と異なる南方的

形態であること、便所と豚舎が未分離状態であるなどの強い南方的要素を持つ。一方でオンドル房など北方大陸文化的要素が混合していると述べている。この記述にある豚小屋と便所が一体になった型は、今も沖縄本島や、渡名喜島で、その痕跡を見ることができる。高野のいう南方的要素、すなわち豚小屋と便所が一体となった型は、琉球を中心とする南西諸島の文化と一致すると考える。次の項で考察する石垣の様式でも、南西諸島の様式と済州島の様式が一致することと共通しており、石垣も豚小屋や便所の様式も、共通した文化圏であることを物語っていると考えた。

次に屋敷囲いについては、敷地の周囲を高い石垣で囲っていて、熔岩塊を積み上げただけの石垣か、あるいはセメントで固めた石垣が存在すると高野（1996）は述べている。済州教育大学鄭光中教授は1970年代から、石垣がブロック塀に変わってきている。それは、道路などの整備が行われ、石の積みなおしに伴って行われたと述べている。また、年代は明確に示されていないが、高野（1996）は農漁村でも、ブロック造りの2～3階建ての近代家屋へと建て替えが進んでいると述べている。

2005年3月初旬の調査時には、かなりブロック造りの建築物が増加していて、草屋根の民家の比率は極めて低くなっており、今後保護しなければ残らない文化遺産となっていく可能性がある。こうした草屋根の民家であったことが、屋敷囲いと

して軒の高さを超える石垣を必要とした一つの要因であったと考える。

4. 北海岸の石垣

4.1 内都洞

北の海岸に近い内都洞や、帰德里、翰林には、民家の屋敷囲いとしての防風石垣と、畑の中に続く長い防風石垣が分布する。写真2（左）には、内都洞に分布する畑の防風石垣を示した。2005年3月5日の雪まじりの冬の季節風が、一列に積んだ野石積みの石垣の間を吹きぬける。一列積みの場合の石垣の幅は40～50cmまでである。写真2（右）のように野石の間がすいていて風が吹き抜けても、その風力が減ずるので、畑の被害を最小限にするのに十分な防風効果がある。石垣は火山礫を一列に積んでいるだけであるが、玄武岩の火山礫を用いるため、1つ1つの礫は十分に重量があり、石積みをした後人間がゆらしてみても、例えゆれて動いても崩れなければ強風でも崩れることがない。北海岸とその内陸部では、畑の石垣は極めて密度が高い。これは冬の季節風が強いためと思われる。写真3には内都洞集落における曲率を持って築かれた屋敷囲いを示した。石材は玄武岩の火山礫をそのまま用いてあり、野石積みである。高さは約1.5mある。石垣の幅は日本の南西諸島に比較すると狭く、約60～70cmである。



写真2 （左）済州島北海岸の内都洞付近に分布する畑の防風石垣
（右）直径30～50cmの玄武岩の火山礫を用いた石垣。石積みは一列で、風は吹き抜けるが弱まる。



写真3 内都洞集落における曲率を持って築かれた石垣。玄武岩の火山礫を用いた屋敷囲い。



写真4 済州島北西海岸帰德里における防風石垣
(左) 内陸側に立地する屋敷囲い。高さ 1.5m。
(右) 海岸に立地する屋敷囲い。高さ 2.2m。

4.2 帰德里

帰德里は漁村であり、海岸から内陸に向けて集落が分布し、狭い道路で隔てられた民家はどの家も高い石垣の屋敷囲いをもつ。写真4(右)は海岸に立地する屋敷囲いである。この石垣が高さ2.2mであった。しかし、内陸側約150mに位置する写真4(左)では、石垣の高さが1.5mである。一旦内陸へ入ると、防風石垣の高さは急に低くなる。海岸からの距離に応じて石垣の高さは減るが、その高さはサンゴ石灰岩を積む喜界島よりはるかに低い。喜界島(漆原・羽田, 2003; 漆原, 2005)では海岸近くで2.7~3.7mあったのに比較すると、済州島の海岸では最高2.2mの高さである。これは、風力のちがいの他に、済州島の野石の重さが喜界島に比較するとはるかに重いためであろう。

4.3 城邑里

城邑里は島の東部に位置し、その標高は約190~200mである。村の一部は民俗村として観光客に公開されている。村の人々が今も住む集落の一部を図6に示した。道路の交差点は複雑であり、野石積みの石垣が完全に屋敷を囲っている。石垣の幅は40~50cmである。石垣の高さは約1.5mである。道路幅は主道路が4mを超え、脇道は2mかそれ以下である。民家は全て草葺き屋根で、豚小屋と便所が一体になった型が今も残る。伝統的な集落の原型がよく残る村であるが、最も特徴的なことは、石垣で作られた道路の隅角は稜をもたず、曲率をもった丸い隅角をもつことである。この形式は、日本では南西諸島と対馬に分布する様式と一致する。

写真5(右)には、城邑里の集落で見られた今も縄を用いて固定している草葺き屋根を示した。伝



写真5 (左) シュロの樹幹を用いて雨水を集めた甕
(右) 城邑里の草葺き屋根と、縄で固定した民家の屋根

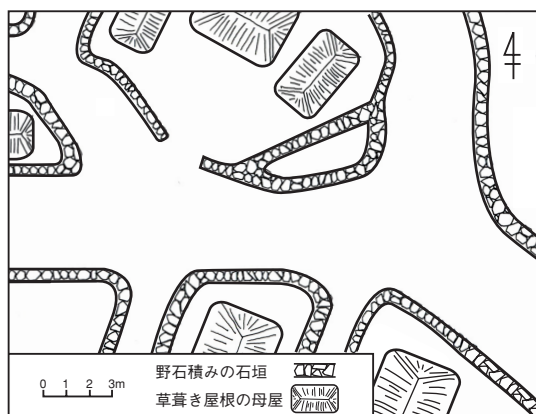


図6 城邑里における集落中心部の石垣。曲率を持った隅角を持つ石垣。

統的な石と粘土を用いた壁を有している。写真5(左)にはシュロの樹幹を利用して甕に集水している様子を拡大して示した。中山間部は地下水が得がたいので、樹木の幹を利用し、降水を集める工夫をしている。このような天水の取水方法は、家の周囲の樺の木などにもしつらえてあった。

4.4 新山里

済州島の南東部に位置する海岸部の集落である。この周囲は温暖であることを利用し、温州みかんの栽培がさかんである。石垣の他に生垣も併用している場合が多く、みかん畑には防風林として日本から導入した杉も併用されている。新山里は緩く海に向かって傾斜するため、道路は全て曲がっていて、直線状ではない。集落の一部の石垣を写真6に示した。図7には集落中心部の石垣のある道路を図化して示した。道路幅は3～4 mあるが、必ずしもその幅は一定ではない。また、石垣の幅も狭く、40～50cmまでである。用いられている防風林はシロダモで、他にも樺などの照葉樹を用いている例が多い。新山里の海岸にはベンチ(bench)がよく発達していて、海岸近くの石垣の高さは180cm、集落の中では150～160cmである。畑の境界を示す石垣は写真6に示すように、高さは1.2～1.3mである。屋敷囲いの石垣より低くなるが、道路に沿って曲率をもった石垣が築かれている。特徴的なのは、道路も石垣も一定幅ではないことであり、きわめて自然発生的な型を保っている事である。



写真 6 新山里集落の周辺における防風石垣。
道路の曲がりにそって曲率をつけて
積んだ石垣。

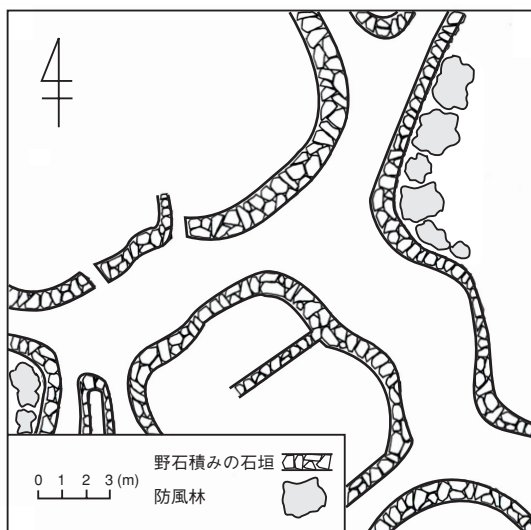


図 7 済州島東海岸の新山里における曲率を持つ集
落の石垣。稜をともない、角度を持った隅角
はない。

5. まとめ

済州島の屋敷囲いとしての石垣は、日本と似ている点と異なっている点がある。それらの特色を以下のようにまとめた。

1. 済州島は火山島であり、玄武岩の火山礫そのものや、海岸又は河川で火山礫が水で研磨された亜角礫が多く分布する。このため、身近にある大量の礫を必要に応じて石垣として積むことができる。
2. 石垣は屋敷囲いばかりでなく、畑の防風石垣、土地の境界を決めるための石垣、烽燧台、砦の石垣、墓などにも用いられている。
3. 積み方は、野石乱層積みであるが、そのほとんどが曲率のある隅角を持つ。屋敷囲いや、畑では特に道路の曲がりに従って積む。畑の石垣は、重い石であるため、一列積みが多い。屋敷囲いの石垣は 60～70cm の幅を有する。
4. 海岸に近い集落や、山麓に位置する場合、ほとんどの土地が傾斜をもつ。従って、道路は方形区を構成するようには敷設されていない。不規則な曲がりを有する道路が交差している

のが常であり、その道路に沿って民家が分布し、畑が分布する。このことが曲率を持つ石垣をつくる原因の一つになっていると思われる。

5. 玄武岩の石垣は、日本で用いている例はほとんどない。硬くて加工しにくく、重い。このため、野石をかり割り、算木積みにすることが難しい。樵石で石垣を作る例は城壁などに限られており、民家の屋敷囲いや、畑の石垣には用いられていない。
6. 海岸近くの集落に立地する民家では、海岸で屋敷囲いの石垣が高く、海岸から少し内陸へ入ると屋敷囲いの石垣の高さは低くなる。しかし、屋敷囲いは 1.2～1.5m 以上を有する。一方、冬の季節風が強い北海岸ばかりが石垣が分布しているわけではなく、島の四周に石垣が分布する。これは、強い季節風やまれにcoming台風に対応する必要があることと、伝統的の家屋が草葺き屋根であり、防風の必要性が高いことと関連していると思われる。
7. 日本の石垣との比較をすると、屋敷囲いの石積みの様式は、これまで琉球様式と呼んできたものに極めてよく似ている。ただし、その

高さや幅は南西諸島のそれより小さい。これは防ごうとする風の風速や風力が弱いばかりではなく、石材の岩質に関連しているようである。南西諸島はサンゴ石灰岩の礫であり、軽いので石垣の幅が広く、高く築いている。しかし、済州島では石材そのものが重くて硬く、加工しにくいことも原因していると思われるが、石垣の幅がせまく、高さも南西諸島より低い。特に畑では一列積みが多く分布する。一列積みでも十分防風効果を上げることができる。また、一列積みでも石材が重いため、石垣が崩れない。

8. 日本の屋敷囲いとしての石垣の分布は極めて残存率が悪かったが、済州島には石垣はよく残っていて、石垣からブロック塀への近年の変化率がきわめて低い。屋根の形式は草葺き屋根からトタン屋根に変わっている率が高いにもかかわらず、屋敷囲いとしての石垣を残している。伝統的石積みがよく残存していて、石垣が人々の生活と密着していることがよくわかる地域である。

謝 辞

済州島の石垣の調査にあたって、済州大学校宋成大教授から多くの石垣に関する事柄を御教示いただいた。歴史的な石垣の変遷などについても私見をうかがう事ができた。また、済州教育大学校鄭光中副教授には、参考文献、石積みのビデオなどの提供をいただいた。二教授の御教示なしに短期間のうちに成果をあげることはできなかった。また当時大学院国際日本学に在学中だった金福姫さんには現地での通訳をいただき、成果があげられたことを記して感謝いたします。岡山大学の金料哲氏にはハングルを漢字、カタカナになおしていただいたことを記して感謝します。

参考文献

- 朝鮮総督府観測所（1936）：朝鮮気象三十年報。
張保雄（佐々木史郎訳）（1989）：韓国の民家。古今書院，296p
李賢英（1988）：済州島の気候。「韓国済州島の地域研究」，学術調査報告書，立正大学地理学教室，56-68。
泉靖一（1966）：済州島。東京大学東洋文化研究所。研究報告（19）東京大学出版会，49p。
川崎繁太郎（1930）：済州島の地質学的観察。文教の朝鮮。
カン・ジョンヒョ（2003）：オルムの王国・生態系の宝庫 漢拏山。ドルベゲ，271p。
カン・ジョンヒョ（2000）：火山島、石物語。図書出版カク，159p。
キム・ヨンドン（2000）：済州道 済州の人々。民俗院，337p。
建設部国立地理院編（1986）：韓国地誌 地方篇四（光州・全北・全南・済州）。
洪始煥（1988）：済州島の洞窟。「韓国済州島の地域研究」，学術調査報告書 立正大学地理学教室，69-82。
Lautensach（1935）：Quelpart und Dagelet, Wiss. Veröff. Museums f. Länderkunde 2. Leipzig, N. F3.
Lautensach（1945）：Korea, Eine Landskunde auf Grund eigener Reisen und der Literatur. 542 Seiten, K. F. Köhler-Verlag, Leipzig.
中村新太郎（1930）：朝鮮の平均高度に就いて。地球，13，3。
中村新太郎（1925）：済州島火山雜記。地球，4-4，325-336。
金文洪（1985）：漢拏山の植生概観。漢拏山天然保護区域学術調査報告書。
姜相培（1988）：済州島の地質と地形。「韓国済州島の地域研究」，学術調査報告書 立正大学地理学教室，14-18。
桝田一二（1934a）：済州島海女の地誌学的研究。大塚地理学会論文集，2下，141-162。
桝田一二（1934b）：済州島に於ける畜産の地理学的研究。大塚地理学会論文集，3，81-102。
桝田一二（1935）：済州島人の内地出家に就て。大塚地理学会論文集，5，1-38。
桝田一二（1939a）：済州島の聚落の地理学的研究（第1報）。地理，2（1），27-41。
桝田一二（1939b）：済州島の聚落の地理学的研究（第2報）。地理，2（2），159-170。
森為三（1928）：済州島所生植物分布について。文教の朝鮮。

- 立正大学日韓合同韓国済州島学術調査団（1988）：韓国済州島の地域研究．学術調査報告書 立正大学地理学教室，155p.
- 高野史男（1988）：総説 済州島の地域性とその地理的・歴史的背景．「韓国済州島の地域研究」，学術調査報告書 立正大学地理学教室，1-3.
- 高野史男（1996）：韓国済州島 日韓をむすぶ東シナ海の要石．中公新書，207p.
- 崔茂雄（1988）：済州島の水理地質について．「韓国済州島の地域研究」，学術調査報告書 立正大学地理学教室，19-30.
- 済州市編（1985）：済州市三十年史．
- 済州道編（1982）：済州道誌上・下．
- 元学喜（1988）：済州島における海女漁業の変貌と生産形態．「韓国済州島の地域研究」，学術調査報告書 立正大学地理学教室，102-118.
- 金宗錫（1998）：済州道伝統社会の石文化—生活用具、防御施設及び社会的機能体としての用途を中心に—．済州大学学校教育大学院社会教育専攻修士論文，133p.
- 宋成大（2001）：石から来て石に帰る人々．図書出版カク，245-264.
- 漆原和子・羽田麻美（2003）：屋敷囲いとしての石垣を作る文化—喜界島 阿伝集落の例—．国際日本学，第 1 号，139-168.
- 漆原和子（2005）：屋敷囲いとしての石垣を作る文化—喜界島小野津集落と阿伝集落の屋敷囲いとしての石垣の比較—．国際日本学，第 3 号，151-174.

Stone Walls Protecting Houses against Strong Wind in Cheju Island, South Korea.

URUSHIBARA-YOSHINO Kazuko and KATSUMATA Hiroshi

In Cheju Island of South Korea, stone walls surrounding houses and on borders of fields are commonly seen. They are built against strong winds by winter monsoon and typhoon. The stones supplied from basaltic volcano are used for building walls. Because the stones are very heavy, the walls are very thin in Cheju Island, if we compare them with Nansei Islands of Japan, in where the stone walls are made by coral limestone. The stone walls surrounding the houses are constructed against the strong winds for protecting dry-grass-roofs of the houses, which are very weak for the strong winds. The style of stone walls belongs to “Ryukyu Style”, which is characterized by the round corners. From the stand point of the cultural areas of stone walls, Cheju Island belongs to the region as same to Nansei Islands, Japan, because the corners of stone walls surrounding the houses are always round along the roads. Sangizumi, which is a very popular style of stone wall corners in Honsyu, in Japan, is not popular in Cheju Island.